

祖母が教えてくれた茶道の世界

早稲田大学2年（東京都）

永森 日香理

中学生から大分の祖父母の家の近くに住むようになった私は、祖母が教えていた茶道のお稽古をよく目にしていました。玄関には蚊取り線香の煙、八畳からはお炭とお香の香り、ピンと張りつめた静けさや笑い声など、その場に参加することがなかった私ですが、和やかな雰囲気を感じられる場所でした。土日は私のお昼寝の場所となる畳が、語らいの場になり、あるときには稽古場としてのお茶室と、自由自在に姿を変えていたことは、当時の私にとっては当たり前前の光景でした。

祖母は、私の発表会や運動会には何でも一期一会だからと、足が悪いのにもかかわらず駆けつけてくれていたのを覚えています。祖母の人を思いやる心、相手の立場になって物を考える所、いつも感謝の心をもつことなど、そして、日々の他愛のない所作は、茶道の教えの一つだった事に気づかされました。

茶道の世界を覗かせてくれた祖母が亡くなり、祖母が愛した茶道をやってみたいと思ったのが茶道部への入部のきっかけでした。

大学1年生の夏休みに、久しぶりに祖母の家の八畳のお座敷に行ってみると、そこは素朴で飾り気のないただの小さな空間でしかないことに気づかされました。大学の茶道の合宿で今日庵を訪問した際も、お茶室にはきらびやかなものはなく、静寂と緊張、簡素な美しさという印象を強く受けました。今まで抱いていた茶道が、かなり違ってみえた瞬間でした。

以前から、寮にいる友人にお茶を点てており、「お抹茶ってこんなにおいしんだ」と感動してもらったことに喜びを感じていました。また、海外へ旅行した際もお茶碗、茶筌にお干菓子だけですが、お世話になったお礼にお抹茶を点てると、誰もが興味を持って楽しんでくれました。その度に、もっと茶道について上手に説明できればと歯がゆい思いをしていました。ゆっくりとですが、もっと茶道のことを学んで、言葉にできなかった茶道の素晴らしさをみんなに広めたいという思いへと少しずつ変わっていきました。

茶道部では2年から裏千家関東学生茶道研究会に所属させていただいています。普段の生活では知り合えない社会人の方々、他大学の人との出会いもたくさんあり、全く違うコミュニティの人と茶道を通して出会い、また新しい学びを得ることもできています。これからどのように広がっていくのかわかりませんが、きっと沢山の失敗をしながら、けれども多くの感動と学びがあるに違いないとワクワク、ドキドキしています。

お茶室という非日常的空間で、茶道という接点を持っている人同士でその瞬間を共有することの大切さにも気づかされました。

このように茶道を通して学んだことを実生活に取り入れ、友人、知人たち、様々な人と共に、茶道という日本文化を通して、特別な時間を作っていきたいと思っています。そして、私は旅行が大好きなので、お抹茶と茶筌の旅先に持って行き、お抹茶を振る舞い、少しでも世界の人々

にお茶の愉しさを共有したいです。